

# 港湾振興便り



2022. 3

第178号

\*:

## 目次

\*:

1 ポートエッセイ — 「ジュニア・ SHIPPING・ジャーナリスト賞」 —  
～ 日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 中原 八一 ～

## 2 トピック

- 釧路港島防波堤での藻場の創出によるCO2貯留効果を確認！  
(北海道開発局 港湾空港部 港湾計画課)
- 「全国アマモサミット2021inあおもり」が開催されました！  
(東北地方整備局 青森港湾事務所 海洋利用調整室)
- 「多摩川スカイブリッジ」が開通しました！  
(関東地方整備局 港湾空港部)
- 「みなとオアシス金沢港」が登録され、登録証の交付が行われました  
(北陸地方整備局 金沢港湾・空港整備事務所)
- 国際フィーダー船が舞鶴港に初入港  
(近畿地方整備局 舞鶴港湾事務所)

\*:

1 ポートエッセイ — 「ジュニア・ SHIPPING・ジャーナリスト賞」 —  
～ 日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 中原 八一 ～

\*:

新潟市の小学校の一部ではあるが、5年生を対象に海事産業に関わる船や港について学ぶ機会を設けている。

新潟港の見学とともに、船や港の役割や仕組み、それと自分たちの暮らしにどの様な関りがあるのかを学んでいる。

ご存じの通り、港は私たちの経済と暮らしを支えている重要なインフラではあるが、一般の人には、なかなか近づき難いエリアであり、殆どの人たちは身近なものと感じる機会が少ないようだ。

この小学校の様に、次世代を担う子供たちが、船や港の果たしている役割を学び、自分たちの生活に、どの様に関わっているのか知ってもらうことは大変意義深い。

公益社団法人 日本海事広報協会は、「小学生」や「中学生」、「高校生」を対象に、その学習成果を新聞形式にまとめたものを作品に、「ジュニア・ SHIPPING・ジャーナリスト賞」として、2013年度から募集し表彰をしている。

今年度は、1, 141点の応募があったと聞いている。

内容は、SDGsなどの地球環境に関心を持っている作品が数多く見られたとのことで、大人より子供の方が環境問題については、敏感なようである。

また、審査委員の一人であるアグネス・チャンさんから、「子どもたちに教えるとともに、子どもたちが

ら学ぶというのは大人にとって最高の幸せです。」と、総評を頂いている。

会員の方々には、機会がありましたら是非作品を見ていただき、子どもたちの船や港に係る思いを感じ取っていただきたい。

一生懸命に取り組んだ成果として、今年度は、新潟市の小学校一校でグランプリの「国土交通大臣賞」を始め「一般社団法人 日本船主協会会長賞」、「公益社団法人 日本港湾協会会長賞」、「審査委員特別賞」、「団体賞(優秀賞)」と数多く受賞したことは、子どもたちが、船や港に興味を持ってくれたことの表れであり、真剣に学んでくれた成果でもある。

今後もこの活動が続くことを願っている。

会員の皆様の港湾においても、子どもたちに船や港の見学や学ぶ機会を提供して頂くとともに、暮らしに身近なものとして感じてもらえるよう取り組んでいただけると有難い。

\*:

## 2 トピック

\*:

### ●釧路港島防波堤での藻場の創出によるCO2貯留効果を確認！

(北海道開発局 港湾空港部 港湾計画課)

釧路港の沖合の防波堤では、浚渫した土砂の有効活用により浅場を設け、コスト縮減と合わせて海藻類等を生息させるプロジェクトを、北海道開発局と寒地土木研究所が連携して実施中です。

この度、北海道港湾のブルーカーボン定量化検討会を開催し、浅場の試験区間3,600m<sup>2</sup>において、実際に生息した藻場を対象に、海藻類によるCO2貯留、いわゆるブルーカーボンについて有識者による検討を行ったところ、少なくとも年間約0.53kg/m<sup>2</sup>、試験区間全体で約1.9t程度のCO2貯留効果があると試算しました。また、森林の面積とCO2吸収量から単純に計算される単位面積当たりの吸収量と比較すると、この藻場では2.4倍の効果があると推計※できました。

釧路港では大型船の入港が可能となるよう浚渫を実施しており、水深約15mの砂地に整備した島防波堤の港内側に、浚渫土を有効活用した盛土による浅場(水深1m~3m程度)を造成しています。本プロジェクトは、防波堤の整備コストと浚渫土の陸上処分コストを削減し、さらに、光合成を行える浅場により多様な海藻類や魚介類の生息を期待したものです。

この浅場については、試験区間としての3,600m<sup>2</sup>の整備を完了しており、現地の環境調査の結果、スジメやガツガラコンブ等の植物、メバルやカジカ等の魚類のほか、ハナサキガニ等の生息を確認しています。

一方、近年、ブルーカーボンによるCO2の吸収が世界的に注目されています。このブルーカーボンとは、海藻等の海の生物により取り込まれる炭素量のこと、海水中に溶け込んだCO2を海藻等による光合成により吸収し、枯れた後に海底への埋没等で炭素を貯留するという効果があります。

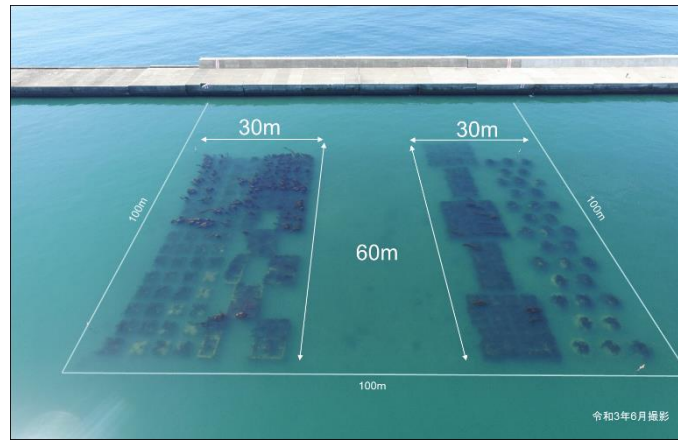
このため、釧路港島防波堤の試験区間で実際に生息した藻場を対象に、有識者等による北海道港湾のブルーカーボン定量化検討会を設置し、海藻類等によるCO2貯留効果を試算するとともに森林のCO2貯留量との比較を行いました。

北海道開発局では、引き続きこのような藻場の創出に取り組み、ブルーカーボンによる脱炭素社会の実現に貢献します。

詳細は下記URLのとおりです。

(<https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/release/slo5pa00000050th-att/slo5pa000000i8ax.pdf>)

※「日本国温室効果ガスインベントリ報告書2021」を参考に、2019年度森林面積と2019年度の森林におけるCO2吸収量から単位面積当たりの吸収量を推計し、釧路港防波堤の藻場のものと比較



浅場における藻場の生育状況（試験区間）

●「全国アマモサミット2021inあおもり」が開催されました！

（東北地方整備局 青森港湾事務所 海洋利用調整室）

2022年1月8日（土）～9日（日）、「全国アマモサミット2021inあおもり」が、青森市のねぶたの家ワ・ラッセにて開催されました。

○「全国アマモサミット」の概要

全国アマモサミットとは、日本の沿岸部にも広く分布する海草である「アマモ」を象徴的なキーワードとして、アマモ場の再生などを通じて海の自然再生・保全を目指す市民、団体、行政等の関係者による全国的な交流会です。

第1回大会が2008年に横浜市で開催されてから、全国各地の沿岸域が抱える環境問題をテーマに、各地域の事例発表や意見交換の場として毎年開催されており、青森市での開催は、2014年の第7回大会以来、2回目となりました。

今回のアマモサミットは「高めよう！むつ湾の魅力」を副題とし、これまでの陸奥湾での活動報告と、陸奥湾が抱える課題に対して、関係者や全国各地の最新の知見を参考にしながら、今後の具体的な活動方針を導くことを目的として開催されました。



NPO法人海辺つくり研究会木村尚理事 記念講演



高校生サミット

## ○「全国アマモサミット2021inあおもり」の内容

サミットでは、関係者からブルーカーボンの取組等について基調講演や研究・活動報告がありました。また、現在、日本テレビ系列で放送されている「ザ！鉄腕！ダッシュ！！」にレギュラー出演中で、NPO法人海辺つくり研究会の木村尚理事から、記念講演をしていただきました。

高校生の部として行われた「海辺の自然再生・高校生サミット」では、北海道から九州までの11校が参加し、海辺の自然再生のために行った活動・研究成果の発表と、各校の活動に対する活発な意見交換が行われました。

そのほか、会場外では関連イベントとして、むつ湾沿岸8市町村の特産品が並ぶ物産展や、貝殻アクセサリーの制作体験ができるワークショップ、シーカヤックにアマモや魚の絵を描く体験など、様々なイベントが開催され、たくさんの方が訪れました。

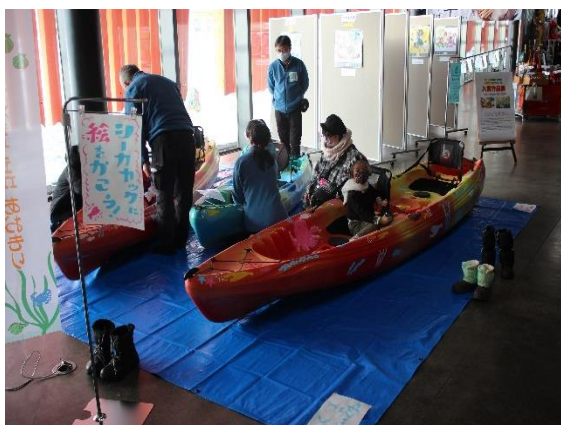
大会の最後には、次年度開催地の千葉県館山市へ大会旗が引き継がれ、閉会となりました。



むつ湾の物産展



ワークショップ



シーカヤック絵描き体験



千葉県館山市へ大会旗引継ぎ

●「多摩川スカイブリッジ」が開通しました！

(関東地方整備局 港湾空港部)

3月12日(土)、川崎市殿町(キングスカイフロント)と羽田空港(羽田グローバルウイングズ)をつなぐ新しい橋「多摩川スカイブリッジ」が開通しました。

「多摩川スカイブリッジ」は、川崎市及び東京都が主体となり、多摩川両岸の成長戦略拠点の形成を支えるインフラとして整備したもので、その一部である羽田空港側の取付部(ランプ橋)を関東地方整備局が施工しました。

「多摩川スカイブリッジ」の開通により、羽田空港周辺地域及び京浜臨海部の連携が強化されることによる国際競争力の強化が期待されます。

開通直前の週末は、まだ車が通行していない橋上を利用して様々なイベントが実施され、開通日当日には新型コロナウイルスの感染対策を行った上で、開通式及びセレモニーが執り行われました。



多摩川スカイブリッジ全景



開通式の様子

●「みなとオアシス金沢港」が登録され、登録証の交付が行われました

(北陸地方整備局 金沢港湾・空港整備事務所)

3月9日(水)に「みなとオアシス金沢港」(石川県金沢市)が北陸管内で17箇所目、全国で153箇所目の「みなとオアシス」として登録され、「金沢港クルーズターミナル」において登録証の交付が行われました。

今回登録された「みなとオアシス金沢港」の代表施設である「金沢港クルーズターミナル」は令和2年度に完成し、コロナ禍にもかかわらず入場者数が100万人を超えるなど、金沢の新たな観光スポットとして注目を浴びています。今回のみなとオアシス登録による、地域一体となった取り組みや魅力向上によって、更なる賑わいを見せてくれることを期待しています。



代表施設：金沢港クルーズターミナル

●国際フィーダー船が舞鶴港に初入港

(近畿地方整備局 舞鶴港湾事務所)

京都府北部に位置する舞鶴港において、台湾や中国・欧米等の国際航路に接続する国際フィーダー航路が新たに開設され、令和4年2月15日(火)に初入港、歓迎式が開催されました。

この航路は、井本商運株式会社が令和3年12月から実施している神戸港と敦賀港、境港とを結ぶフィーダー航路に加えて、舞鶴港に定期航路を開設したものです。

これまで舞鶴港で就航しているコンテナ定期航路は韓国等のアジア向けでしたが、今回欧米など他の地域につながる航路が初めて開設されたことで、関西圏北部の活性化につながるだけでなく、国際コンテナ戦略港湾への集貨にも寄与するものとなります。

歓迎式では、多々見良三舞鶴市長による歓迎の挨拶やコンテナ船運航会社代表者への花束や入港記念盾の贈呈などが行われました。

・運行船社：井本商運株式会社、OOCL (Orient Overseas Container Line Limited)

- ・船 種：コンテナ船
- ・船 名：だいこく(総トン数 749トン、最大積載能力 189TEU)
- ・航 路：神戸(土)～敦賀(火)～舞鶴(火)～境(水)～神戸(土)
- ・寄港頻度：週1便(火)

